

「茶旅」

”こぼればなし“

(8) 中国径山寺 お坊さんが茶を持ち帰った訳

コラムニスト 須賀努



1月からこちらに連載しているご縁が、静岡のお茶農家、お茶屋さんを訪ねる機会がめつきり増えている。日本茶について知りたい者にとっては、豊富な茶畑、お茶に詳しい方が多い静岡へ行くのがやはり色々勉強になる。

先日静岡駅からバスに乗り、梅ヶ島というところへ行く機会があった。ここには『天空の茶畑』と呼ばれる標高1000mの茶畑があり、その景色は実に素晴らしいものだったが、『日本で一番高い茶畑』と聞いて驚いた。アジアの茶畑を歩いている者にとって標高1000mの茶畑など、決して珍しくはない。インドのダージリンだって1000m以上の茶畑はいくらでもあるし、台湾の梨山では2500mの茶

畑すら見学している。なぜ日本には高いところに茶畑がないのか、今後考察してみたい。

バスは途中で蔵野という場所を通過したが、そこには「本山茶の茶祖聖一國師墓所」との表示があった。静岡県茶業会議所のHPによれば『本県の茶は、駿河国柘沢(静岡県郊外)に生まれた聖一國師(1201~1280年)が、中国から種子をもたらし、出生地に近い足久保にまいいたのが始まりとされます』とある。日本一の茶産地、静岡茶の源流はこの辺にあったのか、としばしば感慨に耽る。

そして3年ほど前に、中国浙江省杭州郊外の径山寺を訪れた時のことを思い出した。ここを訪れた理由は、

龍井茶を売っている杭州出身の茶莊オーナーが普段は値段の高い龍井茶など飲まずに、径山茶という価格は安い味がおいしいお茶をこっそり飲んでるのを知って、現地を見てみたくなったためである。今では有名になってきた径山茶だが、昔は客に出すと龍井茶が売れなくなると言われた、隠れた銘茶だった。

その径山寺は杭州からバスを乗り継いで1時間半ほどかかる、かなり山深いところにあった。バスを降りると「日本茶道の源」という文字が目飛び込んできた。そしてお寺の裏山には、竹藪があり、静寂が周囲を覆い、ここは日本かと見まがうような風景が広がっていた。聖一國師がここで修行したという記念碑も建てられていた。

『径山禅寺は天目山東部凌雲峰一帯、東北峰の径山にある、南宋の五山の一代の742年に法欽禪師が創建、宋代には僧侶3,000人という隆盛を極めた。茶を仏に捧げる修行があり、

茶樹は開祖が植えたとの説がある。径山茶宴と呼ばれる、僧侶により開かれる大茶会があり、日本の茶道の源流とも言われている。また天目茶碗の天目はこの山から来ている』との説明を受けたことをはつきりと記憶している。

径山茶は銘茶と言われてきたが、清代には径山寺が廃れて顧みられなくなったことから、茶も忘れ去られた。

文革で荒れ果てた寺はその後復興され、茶も復刻されたというが、その名前は龍井茶には遥かに及ばない。地元の人に寄れば、「龍井茶が有名になったのも国家指導者が推奨した、所謂国策だった」と。径山茶は国の政策から外れているのだろうか。

そしてこの寺には仏教修行の一環として、茶摘み、製茶が昔から行われており、その伝統は現在まで伝えられている。寺が茶園を所有し、春には僧侶が茶を摘む。寺院内には製茶室があり、製茶道具が置かれていた。今でもこの寺だけではなく、杭州あたりの古い寺では修行の一環として茶作りが行われている。

実は以前から疑問に思っていたことがある。日本では空海や栄西が茶の種子を持ち帰ったとよく言われているが、お茶は単に種を植えただけで出来るものではない。茶園管理を含む茶葉の栽培と製茶という2段階を経て、初めてお茶が出来る訳だから、中国

からお坊さんがお茶を持ち帰っても、製茶技術がなければ、茶はできないと思っていた。だが日本の僧侶は中国の寺、特に浙江省など茶畑のある地域で数年の修行をしているケースが多く、その修行の中に茶業が含まれていたとすれば、茶の種を日本に植えただけでなく、製茶の手法も伝授したのではないか。そうであれば、日本における僧侶と茶の関係が何となく説明できるような気がした。

中国では元々茶は薬であり、そして高価なものであったので、一般人が簡単に飲めるものではなかったと言われているが、一部では寺の僧侶が瞑想修行などで、眠気を防ぐために茶を飲んだという話を聞く。これまた仏事と茶が関係したエピソードだが、聖一國師もお茶を自ら作り、その修行に生かしたとすれば、何故僧侶が中国から茶を持ち帰ったかという疑問への1つの答えになるのかもしれない。

(すが つとむ)



径山寺の製茶室